

京都 キャンパスカフェ拠点に



カフェ樹林で学生らと話し合う河波さん
(右から2人目)龍谷大深草キャンパス

知的障害者の働く場

向陵会が龍谷大と連携

社会福祉法人向陵会（京都府向日市）が、龍谷大（京都市）の委託を受けて運営している深草キャンパスの「カフェ樹林」が、社会貢献事業を生み出す拠点に発展している。20年前に開設された、知的障害者と学生が共に学ぶオープンカレッジが母体。カフェに集った学生らが、靴磨き事業など障害者の働く場をつくるソーシャルベンチャーを次々と立ち上げている。

（関西支局・飯塚隆志）

カフェ開店のきっかけは、短期大学の授業として、楽や芝居をつくり上げることで2002年に開設されたオープンカレッジ「ふれあ学に行ける」と歓迎した。

障害者は、学ぶ中で「働くこと」を次の目標にするようになり、龍谷大は「ふれあい大学」でも関係のあった向陵会に委託する形で06年春、知的障害者が働く「カフェ樹林」をオープンさせた。

向陵会主任、河波明子さん（64）は13年に働き始めたが、当初、障害者らはけんかばかり。「面白くない」と思いながら、仕事をしているからでは「と考え、ひたすら笑わせることを心掛けた。

「笑顔が出たら言葉が出た。言葉が出たらコミュニケーションが取れた。コミュニケーションが取れたら信頼関係が生まれたら、指示したことができるようになり、スキルも驚くほど上がった」

河波さんは「カフェ樹林」を切り盛りしながら、龍谷大名誉教授の加藤博史さんと毎月、打ち合わせ。「チーム・ノーマライゼーション」が生まれた。チームと向陵会が一緒になって、カフェ樹林を教室にした「トリムタブ・カレッジ」を立ち上げ、「飲食」や「靴磨き」などを学び、実践する場を設けた。障害者らは、朝から昼過ぎまでカフェの運営に携わる一方、靴磨きなどを練習する。ここから、「革靴を履いた猫」（革猫、京都市）と「たいまつ」（京都市）が生まれた。「たいまつ」は、専門職だけでなく、一般企業も対象にして、障害者の向き合い方などの研修を行う会社だ。

革猫の社長、魚見航大さん（28）は、政策学部在学中の15年、障害者と共に靴磨きを習得、卒業直前の17年に革猫を立ち上げた。

一緒に靴磨きを学んだ藤井琢裕さん（31）ら3人の

メモ

トリムタブ・カレッジトリムタブは、かわい個人でも最大限の決意をもって正しいことを行えば、人類という巨大な船を動かさう、という米国の思想家、バックミンスター・フラー（1895～1983）の主張。ここから名前を取った。

河波さんは「障害者手帳（精神）」を持っていた学生も劇的に改善し、普通に働いている。何人もの奇跡を見てきたし、カフェも、学生との奇跡的な出会いのたまもの。障害者が社会に出ていくのを見るのは毎年、楽しみ」と話している。